

## いのちを送る儀式（葬送儀礼）



故人を偲び、故人の冥福を祈る「葬儀」や「法要」などの儀式は、同時に、残された遺族の気持ちを落ち着かせるとともに、「いのちの大切さ」、「いのちを慈しむこころ」を育む(学ぶ)機会でもあります。

こうした、いのちを送る儀式として、古くから「枕経」、「通夜」、「葬儀」、「忌日法要」、「年忌法要」などの儀式が営まれてきました。

また、これらの儀式は、地域の風習が色濃く反映され、さまざまな形式で行われてきましたが、時代の変遷とともに人々の考え方が変化する中で、今日では、本来の目的が失われたと思われるような、極端に簡素化された形式のものもできてきました。

二度とやり直しのきかない、大切な人の「いのちを送る儀式」を悔いのないものにするためにも、古来より行われてきたそれぞれの儀式の意味を理解することは、とても大切なことです。

### ★「枕経（まくらぎょう）」

「いのちを送る儀式」として、最初に行われるのが「枕経」です。もともとは、臨終を迎えようとする人が、平穏な心（臨終正念）でその時を迎えられるよう、僧侶が枕元で読経し親族が最期を看取るのが本来の形式でした。

しかしながら今日では、多くの人は病院で臨終を迎えられ、枕元での読経ができないことから、ご遺体が安置された場所で行うのが一般的となってきてしまいました。

「枕経」は、臨終を迎えた人の心の平穏のために行うものであり、大切な人のいのちを送る最初の儀式として、是非とも行っていただきたいものの一つです。

### ★「通夜（つや）」

「夜伽（よとぎ）」、「逮夜（たいや）」とも呼ばれ、葬儀の前夜に行われる儀式です。本来は、家族やごく親しい親族が、燈明や線香を絶やすことなく、夜通しで故人を見

守り、在りし日の思い出とともに故人を偲び、成仏を願う儀式でした。僧侶による読経が夜通し行われていた時代もあったようですが、今日では、自宅で葬儀を行うことが少なくなったことから、夜通しで行われることも少なくなってきました。なかには、「葬儀に参列できない人のための代用の儀式」という誤った考えから、通夜が省略されることもあるようですが、故人のご遺体のそばで、お元気だった頃に戴いた御恩に感謝し、まだ同じ時空間にいらっしゃる御霊とともに夜を過ごす「通夜」は、「いのちを送る儀式」としてとても大切な儀式です。

## ★「葬儀（そうぎ）」

葬儀とは、単に「亡き人とお別れをする儀式」ではなく、亡き人を弔い、霊界に送る儀式です。法華宗では「法号（戒名）」を授け、「引導」をわたすことが葬儀の柱になっています。法号とは、法華宗に入信帰依されている人に授けられるもので、法華宗信徒の証であり、日蓮大聖人の弟子であることを証する霊界での「名前」です。「引導」とは、仏さまが人間を救うため教え導いて仏道に引き入れることを言いますが、葬儀では、導師が「引導文」を拝読し、亡き人に「引導文」を聞かせることで、罪障消滅が叶い、苦しみから救われ、霊山浄土に送ることができるのです。

## ★「忌日法要(きじつほうよう)」

人が亡くなり、次の生を受けるまでの四十九日間を「中陰(ちゅういん)」といいます。その霊を初七日忌から七日毎に供養するのが「忌日(中陰)法要」です。そして七回目の四十九日を「満中陰(まんちゅういん)」といい、むすびの忌日法要を行います。

今生で、たとえ悪業を行った霊であっても、忌日法要を重ねる(お題目をお唱えし、追善供養することによって、故人がその功德を得て、より良い世界に生まれ変わる(成仏する)ことが可能なのです。

満中陰(四十九日)までの間、亡くなった方の霊は行き先が定まらずにさまよっているとされます。四十九日が過ぎると、死者は六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)のいずれかの世界に生まれ変わるとされます。このために満中陰は「忌み明け」とも言われ、死者が六道を越えて仏になれるように祈り、特に盛大な法要を行って供養します。

そして、故人の命日から百日目に行われるのが百か日(卒哭忌(そっこくき))法要です。これは、遺族が悲しみに一区切りをつけ、嘆き悲しんでいた状態から日常に戻る節目として行われる法要です。

<法要を営む日>

忌日(中陰)法要		
初七日	しょなのか	命日も含めて7日目
二七日	ふたなのか	命日も含めて14日目
三七日	みなのか	命日も含めて21日目
四七日	よなのか	命日も含めて28日目
五七日(三十五日)	いつなのか(さんじゅうごにち)	命日も含めて35日目
六七日	むなのか	命日も含めて42日目
七七日(四十九日・満中陰)	ななのか(しじゅうくにち・まんちゅういん)	命日も含めて49日目
百か日(卒哭忌)	ひゃっかにち(そっこくき)	命日も含めて100日目

## ★「年忌法要(ねんきほうよう)」

年忌法要とは、定められた年の命日に行う法要のことで、中国で行われ始めたものが日本に伝来し、先祖崇拝と結びついて現在の形になったと言われていました。

年忌法要は、霊山浄土に行かれた故人を追善する（善を送る）ことで、故人がさらなる精進の道へと進んでいただくために行うものです。

亡くなって1年目を「一周忌」、2年目を「三回忌」、その後、七回忌（6年目）、十三回忌（12年目）、十七回忌（16年目）と、3と7の年度に行います。さらに五十回忌、百回忌と続きますが、一般には、三十三回忌または五十回忌をもって「弔い上げ」として、法事の締めくくりとされています。

また、年忌法要では、肉親の死を目前にした悲しみの中から、これを縁として信心の心を起こし、御報恩の念を抱き、一つ一つの貴重な仏縁の法要において、お釈迦様や日蓮大聖人のみ教えをよく聞き知ることが大切なのです。そうしてこそ、一つ一つの法要に本当の意味が生まれるのです。

<法要を営む年>

年忌法要			
一周忌	命日から満1年目	三十三回忌	命日から満32年目
三回忌	命日から満2年目	三十七回忌	命日から満36年目
七回忌	命日から満6年目	四十三回忌	命日から満42年目
十三回忌	命日から満12年目	四十七回忌	命日から満46年目
十七回忌	命日から満16年目	五十回忌	命日から満49年目
二十三回忌	命日から満22年目	百回忌	命日から満99年目
二十七回忌	命日から満26年目		

以上が、いのちを送る儀式の主だったものですが、最後に、法華宗宗務院『無上道』編集部葬儀問題編集班が編集された「葬儀－送るいのちの儀式 ～伝えるべき日本人のこころ～」の最後の一節をご紹介します。

人は亡くなってしまえば目に見えません。亡き霊が険しい冥途の路を歩いていても見えません。ご飯が食べたくても、供養を求めているも見えないのです。しかし、生きている人間の「こころ」だって目には見えないではないですか。死者儀礼を目に見えないからといって、信じないでおろそかにする人は、生きている人の「こころ」をも信じず、おろそかにする人になってしまうのではないのでしょうか。「送る命の尊厳から生きるいのちの大切さを学ぶ」とはそういうことだと思います。目に見えないからこそ尊いのです。死者儀礼が軽んじられる風潮がある現代、人の命をも軽んじる日本人になってしまわないためにも「葬儀－いのちを送る儀式」の重要性を今一度考え直すべきであります。

<参考・引用>

- ・「葬儀－送るいのちの儀式 ～伝えるべき日本人のこころ～」：法華宗宗務院『無上道』編集部葬儀問題編集班；法華宗宗務院；平成25年12月13日
- ・法華宗(本門流)ホームページ Q&A (<http://www.hokkeshu.or.jp/question/index.html>)

